
nd of Zelda -Index&Magical of Vesperia-

ラギア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Legend of Zelda - Index & map : Magical of Vesperia -

【Nコード】

N2438BA

【作者名】

ラギア

【あらすじ】

ゼルダの伝説 トワイライトプリンセスとスカイウオードソード、禁書目録にまどマギにヴェスペリア。俺が気に入っている物を無理矢理クロスオーバーさせました。

初めて書くので、更新が遅くても叩かないで下さい。

リンクの性格は姫川さんの漫画版ゼルダを参考にしています。

嫌な方はスルー推奨。

このクロスオーバーについて+設定など（前書き）

とりあえず、このクロスオーバーについての説明をします。

使用作品は

とある魔術の禁書目録

魔法少女まどか マギカ

ゼルダの伝説 トワイライトプリンセス

ゼルダの伝説 スカイウォードソード

Tales of Vesperia

誰得なんだろう・・・俺得か

このクロスオーバーについて+設定など

思いついた瞬間、これは完結させたいと思いましたw

この作品は、

ゼル伝トワプリ×まどマギのクロスオーバー

ゼル伝スカイウォード×禁書目録のクロスオーバー

最後に感動(？)の完結編！(ゼルダ二作品×TOV)・・・を予定しております。

完結編だけクロスさせる作品が思いつかなかったorz・・・

まあギリギリで思いついたからいいけど。

個人的にフレンvsリンクって書いてみたいしw

でもこのクロスオーバーはアリなのか・・・？

凄く怖いデスww

ちなみにトワプリはラストダンジョン直前

スカイウォードはラスボス直前の設定です。

最後に、俺は地の文が下手で、しかも忘れっぽいので、未完結に終わってしまうかもしれません・・・

そうならないように精一杯頑張ります！

(他に考えてるクロスは、ウルトラマンガイア×禁書だったり夢喰いメリー×球磨川だったりアギト×禁書だったり・・・やっぱ妄想するだけで十分ですねw)

さて、設定を少し（ネタバレ注意！）

因みにリンクの性格は姫川さんの漫画版ゼルダを参考にしました。

リンク（TP） 一人称「俺」

ハイラル城の結界破壊直後にまどマギの舞台へワープ。

何故か奥義を忘れてしまっている。

アイテムの殆どは魔女の結界中に散らばってしまう。

狼状態のセンスで魔女を探知可能。

頑張ってハッピーエンドに持っていこうとするが・・・

リンク（SS） 一人称「僕」

過去の封印の地で終焉の者に続く道へ進んだが何故か事故を起こして学園都市へ。

事故の影響でアイテムが四散。加えてSSのモンスターが学園都市に出現。 だけど物語にあまり影響しない。

ネセサリウスの魔術師が「大切な人を助けたい」と発言し、自分に似た想いを感じた為、魔術師に協力する。

冒険ポーチ大活躍（予定）

一応トワプリ編↓ワルプルギス撃破まで

スカイウォード編↓禁書争奪、セロリ、vs木原等は必ず入れておきたいです。

本編はいつ始まるか分かりませんw

今月中に一話は投稿したいです。

プロローグ：物語の交差（前書き）

やっぱり地の文難しいな．．．
とりあえずプロローグ完成しました。

プロローグ：物語の交差

何もない、廃墟のような世界に暴れている化け物と、それを遠くから見つめる少女がいた。

彼女は、暴れている化け物を見て歯を食い縛ると、誰にも聞こえないくらい小さな声で呟いた。

「――私の戦場は、ここじゃない．．．!」

その言葉を発すると同時に、彼女は、この世界――時間軸から、姿を消した。

彼女が次に辿り着いた時間軸は、幾つもの偶然が重なり、奇跡を呼ぶ事になる。

とある都市．．．

不幸と運命を共にしている少年は、ベランダに引っ掛かっているシスターを凝視していた。

シスターは少年に話しかける。

「．．．おなかへった」

「．．．へ？」

「お腹いっぱい食べさせてくれると、嬉しいな!」

「―そして、次に起こる」もう一つのアクセント”によって、少年は、逃げることの出来ない戦いに巻き込まれていく。

過去の世界．．．

螺旋状の坂を降り、最下層まで辿り着いた。

剣を携えた青年の目に映るのは、皆が笑顔になれる道のみ。ハッピーエンド

剣が青年に語りかける。

『準備は宜しいですか？ マスター』

「．．．ああ、行こう」

『イエス マスター、しもべ ファイはマスターと共に．．．』

ファイと名乗った精霊は少し間を開けて、言う。

『マスター．．． ご武運を』

青年は頷き、最終決戦へと向かう。

だが、決戦は思わぬ形で幕を閉じることになる。

現代も同様に。

現代の世界．．．

激しい雨の中、この世界の中心部にある巨大な城を睨みつけている青年がいる。

青年は自分の影を見る、すると影から声が聞こえる。

『．．．これが最後の戦いになるな．．．』

そう言いながら実体化する影の住人。

青年は頷き、応える。

「ああ、これでゼルダ姫を救うことが出来る．．．．．いくぞ．．

．ミドナ」

ミドナと呼ばれた影の住人は、黙って頷き、青年と共に城の扉を開ける。

青年がゼルダ姫に逢えるのはかなり先になってしまふということは、誰も知らない、知ることが出来ない。

そして、バラバラに見える世界は、やがて一つに収束する。
違う世界、見知らぬ人間を見て、その世界の主人公は、何を思うの
か。

プロローグ：物語の交差（後書き）

ヴェスペリア編は何も起きずに映画の話が進行した設定です。
楽しいけど難しいなwww
ぼちぼちやっていきます。

第一話：科学と魔術（前書き）

データ消えて焦った・・・
とにかく第一話完成です

第一話：科学と魔術

緑衣の青年ーリンクは、最終決戦の地へ向かっていた。

最後の戦い、この結果で、運命が決まる。

終焉の者を封印すれば、幼馴染のゼルダを助ける事が出来る。

ーだが、気がついた時、目の前には終焉の者はおらず、代わりに謎の建築物が無数にあり、自分はその中の一つの上に立っていた。リンクが困惑していると、リンクが携えている剣の精霊”ファイ”が語りかけてきた。

『・・・マスター、ここはファイの記憶にはありません。しかし、終焉の者の気配もあります・・・”パラレルワールド並行異世界”である確率・・・100%』

「・・・分かってる」

歯を食いしばり、俯くリンク。

失敗したのかー青年の瞳に映るのは、絶望だった。

そう思った時、視界にある光景が映った。

視線の先には、白い服の少女が見えない刃で切り裂かれて倒れた所だった。

それを見た瞬間、考えるよりも先に体が動いた。

ゼルダから受け取った”パラシヨール”を上手く使い、地上に降りる。

そして、リンクがファイに指示を出す。

「ファイ、ダウジングだ！」

『イエス、マスター。ダウジング対象に先程の白い少女を追加しました。』

ファイの能力”ダウジング”を使い、少女が倒れた場所を探す。

『マスター、この建物の中から反応があります。先程の白い少女がいる確率90%』

「・・・急ごう」

リンクは、捕捉した建物の中に入ろうとした。が、

「・・・何やってんだ？ アンタ」

背後から声が聞こえた。

静かに振り返ると、髪がツンツンの少年が、「どいてくれないと家に帰れないんでせうが・・・」と言いたそうな目で見ていた。

少年に聞こえないようにファイが語りかける。

『マスター、彼はこの建物の住人のようです。協力を要請する事を推奨』

その言葉を聞き、リンクは事情を説明することにした。

白い少女の話をした所で少年の顔が真剣になり、「インデックス！」と叫びながら階段を駆け登っていった。

リンクは一瞬思考停止したが、すぐに後を追いかけた。

階段を登り切ったリンクが見たのは、血だらけの白い少女、少女を抱えているツンツンの少年、

そして、その少年を見下している男だった。

「やっぱり、”人払い”のルーンを刻んでおいた方が良かったかな・・・」

溜息をつきながら男が呟く。

リンクが質問をする。

「まあ、月並みな質問だけでも・・・”これ”はお前がやったのか？」

男は答える。

「あのツンツンにも言ったんだがね．．．これは僕の仲間がやったんだよ」

その言葉を聞き、リンクは無言で背中の剣に手をかける。

「やる気かい？ まあ、少しくらいなら遊んであげてもいいかな」
そう言うと、男の手の平から炎剣が出現した。

「ステイル」マグヌス、魔法名「殺し名は”Fortis931”、意味は”我が名が最強である理由をここに証明する”．．．聞きたくないが、君の名前は？」

ステイルの問いに、リンクは剣を抜き、笑みを浮かべながら答える。

「僕はリンク、お前の魔法名とやらに合わせるなら、”Frols Wind025”、んで意味は”黄金の三角を手にする勇氣”．．．
つて所か」

第一話：科学と魔術（後書き）

今更だけどタイトル微妙すぎワロタwww

魔法名なんて考えるもんじゃないな・・・

次回はステイルVSリンクになります。

リンクは気がついていませんが、アイテムの殆どを紛失しています。

魔法名の数字の意味は、スカイワードが25周年だからね。

第二話：魔女狩りの王（前書き）

ちよつと回りくど過ぎる気がするが・・・

第二話完成です。

この調子だと学園都市編終了するのはいつの日か・・・

第二話：魔女狩りの王

「わざわざ僕らのやり方に合わせてくれるなんてね．．．」

ステイルは笑みを浮かべ、リンクを睨みつける。

「．．．別に、名乗ってみたかったからね」

「だがそんな気持ちで真似してもらうと困るんだよ．．．ねっ？」

ステイルは構えている炎剣を思い切りリンクに突き刺す。

「．．．！」

リンクは咄嗟に盾を構え、炎を防ぐ。

リンクが持っている”ハイリアの盾”は、女神ハイリアの祈りを込めた、雷龍曰く、『べらぼうに強い盾』である、炎による熱ではまづ絶対に溶けない。

そして、ステイルの炎剣は摂氏三千度の炎だ。

普通の鉄の盾ならば溶けてしまっていただろう。

「へえ？ 溶けると思ってたんだが．．．」

「こいつは特別なんだよ．．．」

その言葉を聞き、ステイルは納得する。

「それなら、もう少し本気を出してあげようか．．．」

手を頭上に掲げる。

同時にリンクも剣を同じように掲げる。

「炎よ．．．」

『”スカイウォード”のチャージ完了．．．』

二つの声が響く。

「巨人に苦痛の贈り物をッ！！」

「くらえええッ！！」

二人は同時に手を振り下ろす。

紅い断罪の炎と、蒼白の聖なる刃が音を立てて激突する。

「すげえ．．．」

少年は、ただ見つめることしか出来ない。

白い少女が少年に話していた”魔術師”、その強さは、想像以上だった。

リンクはその隙にステイルの懷へ飛び込み、下から大きく斬り上げる。

「ハアアッ！！」

「クソッ！」

ステイルは体の向きを変え、ギリギリで避けた。

そして、両者の立ち位置が入れ替わる。

場所が広いドームのような場所なら、リンクはステイルを翻弄させる事が出来ただろう。

だがここは一本道、幅も思ったより狭く、高さも充分ではない。

「そりゃ、俺の寮だから狭いよな．．．って俺は誰に話しているんでせう？」

「「知るか！ 地の文読むな！！」」

呑気に呟く少年にリンクとステイルはお互い目を逸らさず突っ込みを入れる。

そこでステイルは思考する。

（そうだ．．．僕の目的は”彼女”の”回収”だ．．．ならやはり、相手をしなくても良いな．．．）

ステイルはカードを取り出し、リンクの”ー”後ろ”にいる少年に放つ。

「「！？」」

リンクと少年は驚き、急いで身構える。だが、リンクの頬を掠り、通り過ぎた瞬間、物凄い勢いで巨大な炎が少年を包み込む。

「”吸血殺しの紅十字”．．．それを改良したものだ、威力は劣るが人一人焼くには十分な火力を誇る」

「．．．！！」

「そういえば、まだ僕らの目的を話していなかったね．．．」
ふう、と一息つき、ステイルは続ける。

「僕らの目的は、”禁書目録”^{彼女}を回収することだ」
リンクは驚かずに問う。

「回収・・・彼女が物だって言うのか？」

ステイルは冷静に答える。

「物さ。だって彼女は、”十万三千冊の魔道書”^{頭の中}を記憶に詰め込んでいるからね」

傷付けるつもりはなかったんだが、と付け足したステイルに、

「・・・なるほど、”完全記憶”って訳か」

確認をとる。ステイルは笑みをこぼし、

「どうやら、”あの馬鹿”よりは飲み込みが速いようだね。説明が
楽で助かる」

そう言った瞬間。

バキン、と、何かが割れるような、鈍い音がリンクの背後で鳴った。
リンクが振り向くと、少女を抱え、右手を突き出している少年の姿
があった。

「ーなるほど、こいつは、魔術にも反応するのか・・・」

少年が不敵な笑みを見せると、リンクに近づき、囁く。

「俺が時間を稼ぎます。あなたは、彼女をー^{インデックス}禁書目録を連れて
逃げて下さい」

「逃げるったって何処に？ それに、場数は君よりは多く踏んでい
る、まずはあいつを退却させよう、話はそれからだ」

少年はしばらく考え、

「・・・分かりました」

そしてインデックスという少女の元へ駆け寄る。

それを見ていたステイルは、「絶対に逃がさない」と呟き、詠唱を
開始した。

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ・・・」
ステイルの周りで、炎が渦を巻く。

それを見てリンクは、悲しい調べを聞いているように感じた。

「それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり・・・」

」

それは、”勇者の詩”を完成させたリンクだから分かることだった。
「それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり……」

救いたい人を救えない。

守りたい人を守れない。

「その名は炎、その役は剣」

ステイルの瞳に映るのは、過去の誓い。

その思いを、リンクは感じた。

自分と同じか、あるいは自分より残酷な運命を。

「顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ！」

――そして、ステイルの目の前に炎の巨人が姿を現す。

「……魔女狩りの王……」

十字架のような剣を持ち、二人を見下す巨人は、大きく咆哮した。

『グオオオオオオッ！！！！』

「……イノケンティウス、意味は『必ず殺す』、だ。その巨人を前に何分立っていられる？」

リンクは余裕の笑みを見せ、

「待つてろ、新記録を更新してやるから」

そう、宣戦布告をした。

「ファイ、インデックスに無理をさせない程度にあいつの倒し方を聞いてくれ」

『了解しました、マスター』

ファイは具現化し、魔道図書館に近づく。

ステイルが「必ず殺す」と言った以上、只の巨人である筈が無い。

そこには何らかの仕掛けがあるはず、と判断したのだ。

「へえ？ 普通は直ぐに攻撃する筈だが……最初に弱点を探すとはね、その”知恵”……対したものだ」

イノケンティウスがリンクに襲いかかる。

だがリンクはバックステップをし、最小限の動きでイノケンティウスの攻撃を避ける。

床に刺さった燃える十字架を、リンクは臆することなく駆け上り、イノケンティウスの頭上で縦向きに回転斬りを放つ。

『グウオオオアッ?』

イノケンティウスは悲鳴を上げ、真っ二つに切り裂かれる・・・

「・・・な!？」

筈だった。

イノケンティウスの体は逆再生したかのように巻き戻り、空いている手で右から左へ振り払う。

左側には当然、壁はない訳で――

「しまった・・・!」

そして、巻き込まれたリンクは外に向かって吹き飛ばされた。

「ハハハハッ! 無様だなリンク!! 魔女狩りの王に臆することなく立ち向かった”勇氣”は認めよう!」

そして、ステイルは少年に向き直り、

「さて・・・君の右手についてはよく分かってないが・・・そろそろ禁書目録を回収させてもらおう」

そう言うが、少年はまだ諦めていないようだった。

「断る」

「ふう・・・もう無駄なんだよ!!」

ステイルが少年に激怒した刹那、
ぷちり、と。

少年のスイッチが切り替わった・・・気がした。

「ふっざけんなよ・・・もう無駄だって誰が決めたんだ!!」

少年の目の色が変わった、ステイルは、そう確信した。

このようなタイプを相手にするのはまずかった。

だが、今更後悔してももう遅い。

少年は――上条当麻は、右手を突き出し、激昂する。

「いいぜ、俺が魔女狩りの王を倒せねえって・・・インデックスを
救えねえって思っているのなら・・・」
上条は、一息置いて続ける。

「まずは、その幻想をぶち殺す!!」

第二話：魔女狩りの王（後書き）

ついにカミヤんのそげぶ入りましたー
あれ？ステイル戦で何話使った？

面白いからいいや

第三話："知恵"; "勇気"; &

結構いい出来になったが・・・

インさんの初台詞がヨハネモードとは・・・

このまま空気化してしまうのか、

ヒロインとして一歩踏み出すのか！

ラギア「まあ物語とは全然関係ないんですケドネ（笑）」

イン「その言い方結構傷つくかも！！」ガブリ

ラギア「・・・代わって欲しいやついる？ M 歓喜だよ？」

第三話："知恵"; "勇氣"; &

「．．．」その幻想をぶち殺す」．．．生憎だが、君が見ているものこの幻想は”現実”だ」

リンクが吹き飛ばされたことも”現実”だし、
上条に勝ち目がないことも”現実”だ。

だが、リンクが死んだとは限らないし、
上条には右手に宿る”イマジンブレイカー異能を消す異能”がある。

どういう行動を起こすか分からない、そう考えたステイルは、イノケンティウスを後ろに配置させる。

（まずは様子見だ．．．）

「まずはこの炎剣だ。さて、どうする？」

ステイルは炎剣を思い切り突き刺す。

イノケンティウスも召喚していて、威力は弱体化している筈だが、それでも致死量には至る。

だが、

「邪魔だ！！」

右手でかき消されてしまう。

「クソ！！」

ステイルが炎を放つ。

上条がかき消す。

放つ。

かき消す。

放つ。

かき消す。

その繰り返しだった。

上条の脳裏には、先程の精霊―ファイとインデックスとの会話が蘇る。

「お前、リンクの剣から出てきたけど．．．何なんだ？」

インデックスの元に近づいてきた精霊に、上条は質問する。

『．．．マスター リンクの剣”マスターソード”に宿る精霊、フアイです。 詳しい説明は割愛させて頂きませんが、こちらでも質問させてもよろしいでしょうか？』

無機質で事務的な返答をされた上条は、咄嗟に「あ．．．ああ」と答えた。

『貴方の右手．．．どんな能力なのですか？』

いつも聞かれる右手のことだった。

仕方がないので、今朝インデックスにもした説明をする。

「この右手は、あらゆる異能――魔術はあまり分らないけど、そういったものを打ち消す能力があるんだ。 名前は”イマジンプレイカー幻想殺し”」
フアイはしばらく考えるような素振りを見せ、『ありがとうございます』と言った。 続けて、

『魔女狩りの王の撃破について、何か情報はありますか？』

と質問した。

しばらく沈黙が続いたが、気を失っていたはずのインデックスが口を開いた。

「――魔女狩りの王本体を叩いても効果がありません。 周辺に刻まれた”ルーン”を消さない限り何度でも蘇ります」

「ルーン．．．？ それより、お前はインデックスなんだよな？」

上条がインデックスに聞く。

同じく無機質で事務的な答えが返ってきた。

「はい、フアイと同じく説明は簡略化させて頂きませんが、私はイギリス清教『ネセサリウス必要悪の教会』所属の魔道図書館です。 正式名称はIndex-Librorum-Prohibitorum。 ルーン

とは、魔術的な意味を持つ文字、図形の事を指します。 恐らく、配置場所は遠くはない筈です」

その説明を聞き、ファイは考え、
『具体的に、ステイル「マグヌス」はどのようなルーンを使用しているのか解りますか?』

と問う。しかし、

「そこまでの情報は解りかねますが、彼は”紙”を使ったルーンを頻繁に使用するようです」

その言葉を聞き、上条が言う。

「待て・・・それなら俺が何とか出来るかもしれない!」

そう、勝機はある。

イノケンティウスのルーンが”紙”で、印刷用の”インク”を使用していたのならば、頭上にある”炎に反応するスプリンクラー”で消すことができる。

ー問題は、どうやってスプリンクラーを作動させるか、なのだが

・

「イノケンティウス、やれ」

『グウオオオオッ!』

その答えは決まっていた。

そして、”協力者^{リンク}”の準備も出来ている。

まず、リンクのように最小限の動きで攻撃を避ける。

そして、偶然あった木の枝を二本、イノケンティウスに近付ける。

当然、枝は燃える。

一つはスプリンクラーに投げる。

そしてもう一つはー

「お願いします!」

下に投げた。

「馬鹿な!?! 彼女と心中するつもりか!?!」

そう言い、ステイルは下を見た。

ジリリリリリ．．．と警報音が上条達のいる階に響く。
そして、スプリングラーから流れる雨が、その階のルーンを濡らし
ていく。

ステイルが見たのは、余裕の笑みで枝を持ち、寮に駆け込んだリン
クの姿だった。

「心中するつもりなんてねーよ気持ち悪い。そして死ぬつもりも
ない。お前が俺に気を取られてる間に、あいつの精霊？ のファ
イって奴が状況を説明しに行ったんだ。お前の事だ、どうせ他の
階にもルーンってやつを仕掛けたんだろ？」

だがステイルは反論する。

「僕のルーンが、こんな水如きで、剥がれるとでも？」
だがその幻想も殺される。

「お前のルーン、数が多いそうだな．．．印刷するのも結構面倒だ
つたろ？ インクが消えないようにしておけばよかったな」

その言葉で、反射的に自分の配置したルーンを見る。

上条の言葉通り、ルーンの文字は、跡形もなく消え失せていた。

「なるほど．．．リンクに炎を持たせたのは、他の階のルーンも消
すためかい？」

「別に、そう思ったただけだよ．．．」

ジリ、と上条が近付く。

「それよりも．．．覚悟は出来てるな？」

ステイルは諦めたような、脱力したような表情を浮かべ、

「ああ．．．存分にやってくれ。その方がスッキリするかもしれ
ない．．．それと、ルーンはこの階にしか配置してないから安心
してくれ」

そう、呟いた。

「分かった．．．歯ア食い縛れよ．．．ちつとばつか響くからな
アー！」

そして、雨のような音が響くこの空間で、鈍い音が木霊した。

殴られる直前に、ステイルは「あの子を救ってやってくれ．．．」と呟いた、らしい。

上条は、ステイルの「インデックスは助けられない」という幻想を

――

見事に殺した。

「やれやれ．．．いつもの貴方はそんな性格キャラでしたか？ ステイル」
「うるっさいな．．．放つといてくれよ．．．神裂」

ビルの屋上で、痴女にも見える服装をした女性――神裂火織は、いつもより清々しい顔を浮かべているステイルに話しかける。

ステイルが殴られ、上条達がインデックスを治療しに知り合いの元を尋ねようと外に出た後、神裂がステイルを救出に来たのである。

神裂がまず驚いた事は、最近、笑う事のなかったステイルが希望を見つけたような表情で気絶していた事だった。

ビルの屋上で事の顛末を聞いた神裂も、同じように笑みを浮かべた。

「ふっ．．．いつもの君は、そんな性格キャラじゃなかった筈だけど？

神裂」

「うるさいですよ、放っておいて下さいよ．．．ステイル」

だが、二人は本当に希望を見つける事が出来た。

トライフォース

知恵、勇気、力を兼ね備えた希望に満ちた二人を、見つけたのだから。

第三話："知恵"; "勇気"; &

さて、禁書目録争奪戦、中盤戦に差し掛かってまいりました!!
短かった代わりにアニメ風の次回予告をば。

ステイルを何とか撃退し、小萌先生の家でこれからの事を話し合う
俺たち。

そこにもう一人の魔術師、神裂火織がやってくる。

「お願いします、私達に力を貸して下さい・・・!」

そこには同じく頭を下げるステイルの姿もあった。

次回、The Legend of Zelda 学園都市編

『剣士の資格』

科学と魔術、そしてライフオーズが交差する時、物語は始まる――

ラギア「まあ予定変更の可能性もありますケドネ（爆笑）」

イン「笑い事じゃ済まされないかも!!」ガブガブ

ラギア「やめてくださいしんでしいます」

第四話：剣士の資格（前書き）

うわああああ！！

なんか適当になったああ！！

一方「うるせえンだよ黙って書け」
ラギア「・・・」カキカキ

第四話：剣士の資格

「．．．」

「．．．」

学園都市の大きな交差点．．．

そこで、二人の剣士が対峙していた。

一人は”緑衣の剣士”、女神ハイリアを護衛する勇者。

一人は”天草式の魔術師”、大切な少女の為に戦う侍。

在り方は違えど、”大切な人を守る”為に二人は戦っている。

話は数時間前に遡る。

上条の高校の教師、月詠小萌の自宅でインデックスを治療した後、これからの事について話し合っていた。

「そういえば自己紹介がまだ．．．というか、満足に出来ませんでしたね。俺は上条当麻です。ファイ？　っていう人．．．には話しておいたんですが．．．」

「ああ、幻想殺しのことならもう聞いたよ。僕はリンク。まあ、見てわかるように．．．　違う世界から来たんだと．．．思う」

「「違う世界．．．？」」

”違う世界”、という言葉に上条とインデックスは聞き返す。

確かに、リンクなんて名前は聞いた事がないし、正直微妙な服装も見ることがない。

それが二人の率直な感想だった。

「．．．微妙な服で悪かったな」

「いやいや！」「そんなことないんだよ！」

二人は必死に弁解するが、なぜ地の文を読んだんだ？　と疑問に思

った二人であつた。

そんなこんなで、リンクは学園都市の世界について、上条とインデックスはリンクの世界について、上条とリンクはインデックスの抱える魔道書^{爆弾}について、説明を聞いた。

（ちなみに異世界に来る、という魔術はインデックス曰く”存在しない”らしい。）

そこまで聞いた所で、ノックの音が室内に響く。

小萌は、合鍵を持っているらしいのでノックをするのはまずあり得ない。

これまでの事から察するに、魔術師・ステイルか、あるいは彼が言っていた『僕の仲間』か、二人同時か。

身構える二人は、恐る恐るドアを開ける．．．そこには、昨日の魔術師、そして恐らく、『仲間』であるもう一人の魔術師の姿があつた。

「始めまして、上条当麻、．．．リンク」

二人は話があるらしく、部屋に上がってもらった。

インデックスは二人の顔を見た瞬間、少し怯えていたが、二人の魔術師が泣きながら土下座するのを見て、二人を許す事にした。

リンクはその光景を見つめながら、思案する。

（普通は許せないが．．．優しいんだな．．．）

「．．．」

「．．．」

「．．．」

「．．．」

決して行数を稼いでいるのではない。

本当に、誰も喋らないのである。

確かに、つい昨日殺し合いまで発展しそうになったのだ。
次の日に笑顔で話し合え、と言う方が無茶な話だ。

これなら断崖絶壁からバンジージャンプの方が幾らかマシだ。

「本当に、すまなかつた．．．」

ようやく口を開いたのは、ステイルだった。

「別にいいよ、そっちも事情があつたんだろ？」

上条が返し、神裂と名乗った女性が答える。

「ええ．．．彼女にも、聞いて貰った方がいいのかもしれない
ね．．．」

神裂は一息置いて、話を始める。

インデックスは一年毎に記憶を消されていること、

二人とインデックスは、同じ教会の人間だということ、
イギリス清教

インデックスの一年前のパートナーが、ステイルと神裂だったこと、
そして、もうすぐ記憶を消さなければいけない時期だということを。
話を終えた後、上条とインデックス、リンクはしばらく考える。

二人はただ現場整理しているだけだったが．．．

何か、何かが引っかかる。

リンクは、そう感じた。

上条が「ふっざけんなよ！！」と叫び、机を叩く。

（何が足りない．．．！？　どれだ．．．！）

必死に答えを探る。

リンクはかつて、己の心を鍛える為、自分の精神世界という地に赴
サイレン
いた。

そこで鍛えたのは、勇気フロル、知恵ネール、力デインの三つだ。

リンクはその中の知恵をフル回転させ、ピース謎の空白を埋めていく。

――人間は普段、いらない記憶を消しながら生きている。

それは違う筈だ．．．
聞いた事がある。

いらぬ記憶は頭の中に残っていて、自分達はそれを文字通り”忘れて”いるだけだと。

――脳の８５％を使って魔道書を記憶している．．．

それもおかしい．．．

そんな綺麗にパーセンテージで括れる物なのか？
だとしたら、世の中の読書好きな完全記憶者はみんな苦しんでのたうちまわるか、死んでいる筈だ。

――同じ教会の．．．人間なんです。

あれ．．．？

ひょっとして、それって．．．

”最初から仕組まれていた”んじゃないあ．．．

そこまで考えた直後、

カチリ、と。

形が合わないパズルのピースが、ようやく当てはまるような感覚を覚えた。

リンクの経験で表すのなら、謎を解いた時に鳴る”あの”効果音だ。
テレテテテテン♪

実際に鳴った。

予想通り、リンク以外の人間が「なんだ今の気が抜けるような音は」

といった表情で周りを見回していた。

「そういうことか．．．」

リンクは笑みをこぼし、魔術師二人を見つめていた。

「やはり、何か掴みましたか？」

「勿論！」

神裂の問いに、リンクが余裕で答える。

そして、自分の仮説を二人に話す。

「――二人が、必要悪の教会の思う壺ネセサリウスになっている事を．．．

「そんな．．．!?」

「僕達は、一体何の為に．．．!!」

リンクが一通り話した仮説を、上条は小萌に確認を取る。

『上条ちゃんの知り合いさんの言う通りですー、完全記憶能力を
持っていても、脳がパンクすることはまずあり得ませんー』

裏付けは取れた。

そして二人の魔術師は下を向き、俯く。

ここからでは見えないが、恐らくインデックスは涙を堪えながら聞
いていた筈だ。

しばらくして、神裂がリンクに話しかける。

「お願い．．．します。 私達に、力を．．．貸して下さい．．．

！」

リンクの答えはすぐに決まった。

「――ああ、当たり前だろ．．．!!」

「俺もだ、ここまで来たんだ．．． 見過ごす訳にはいかない!」

「あ．．．ありがとうございます、とう、ま．．．りん、くう．．．」
「ありがとうございます!!」

「助かる．．．本当に．．．ありがとう．．．！」

この瞬間、絶対に何とかしてやると心に誓った二人だった。

しばらくして、神裂が「協力してもらう為に、まずはリンク、貴方の力を見せて下さい」と言った。

つまりは、どれ程の剣士なのか確認する、といったところだ。

よって深夜に人払いのルーンを使い、誰も来ない、ある意味での閉鎖空間を作り上げた。

誰もいない、いるのは二人の剣士のみ。

ここで少し端折り過ぎたが話は冒頭へ戻る。

同じ剣士として、手を抜いてしまうと相手に失礼だ。

だから神裂も、魔法名を名乗る。

「もう名乗りたくないーそう、誓っていましたが、本気を出さなければ貴方に失礼ですね」

「．．．悪いな」

リンクの謝罪に、神裂は「いいんです」と答え、

「相手が本気を出すのにこちらが出さないのでは剣士の資格を問われる．．．貴方も剣士なら、分かっている筈です」

それを聞いたリンクは、はっとしたように頭を下げ、

「いえ．．．こちらも浅はかな発言をしてしまいました．．．あなたの方が十分に場数を踏んできているというのに．．．ですが」
”大切な人の助けになりたい”．．．その気持ちは僕も同じです、と続けた。

思い返してみれば、リンクの故郷、スカイロフトでも、彼の境遇．．．

・勇者の運命を知る者は多くなかった。

だから、だからこそ。

魔術師達の様に溜まっていたものはあつたのかもしれない。

同じく剣の道を志す彼女に全てを話した時、彼女は笑って答えた。

「．．．貴方の思い、確かに届きました。同じ道を志す者なら、剣を交えるだけで言葉が通じる．．．そうでしょう？」

それを聞き、リンクは久し振りに大きな声で笑う。

そして一息つき、吹っ切れたような表情で確認する。

「始めましょう神裂さん．．．あなたの魔法名を．．．名乗って下さい。僕は、絶対に負けない」

その言葉を聞き、真剣な表情になる神裂。

「ええ．．．”Salvare000”、意味は”救われぬ者に救いの手を”．．．私も、負けるつもりはありません」

二人の剣士が、本気でぶつかり合う。

第四話：剣士の資格（後書き）

ねーちゃんVSリンクが始まると思ったか……………？

ところがどっこい……………

次回へ続きます……………！

これが……………引き延ばし……………！！

上条「ありえねえ……………狂ってやがる……………！！」

リンクが敬語になったのは純粹に、自分より強い、と感じて、尊敬した……………

そういう設定で……………問題ないな……………？

上条「ありがてえ……………ありがてえ……………」
「！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2438ba/>

The Legend of Zelda -Index&Magical of Vesperia-

2012年1月8日13時48分発行